

# 一茶と大小便

伊坂眞鏡

往昔から糞尿を詠んだ歌や句はその數極めて尠いのである。それといふのは、昔から言へる如く「臭いものには蓋をする」<sup>一</sup>といふから、殊更に歌や句に取入れることを嫌つたのかもしれない。その甚だしい例に、上代の公卿達は糞といふ字音を嫌つて、コメ（米）、タ（田）、ニジウ（廿）、イツバチ（一八）と糞の文字を分析して云つてゐたといふことである。

それほぎでなくとも糞、尿、屁、尻なごゝいふことは、何人も話すことを厭ひ、又聴くことも厭うてゐるやうである。斯様に口にすることを嫌ふが故に、歌や句に詠むことの尠いのは當然のことである。だがしかし俳句は俗談平語。又滑稽飄逸なごゝ云ふたてまへから、澤山詠まれてもよい筈である。それにもかゝはらず、糞尿を詠んだ句が故人に尠いといふのは、矢張人間性のあらはれともいへるか、成るべく醜を詠まぬことに、よしんば詠むとすれば、醜を美しくよそはうて句にしよう、つゝめたやうである。彼の松尾芭蕉の句には、

鶯や餅に糞する縁の先

があり、谷口蕪村の句には、

大徳の糞ひりおはす枯野哉

なぎがある。されど松尾芭蕉や蕪村にしても、全く數ふるほどの句もないのである。これに引かへて小林一茶を見るに、

驚くほゞ大小便に關する句が多い。

何故一茶だけが臭いところを、澤山に詠んでゐるのか。こゝに一茶の特殊な生活觀云はうか、風變りな性格がひそんでゐる。たゞ頭から一茶は他人と違つて、臭いところが好きだつたから、句を作つたまでのこゝであらうと、簡単に片附けるわけにもゆくまい、一茶もやはり一人前の人間だ。臭い、人の嫌がる大小便を嫌がつてゐたを見るのが自然であらう。一茶は狂人でない限り、大小便を堪らなく好いたであらうなと、出鱈目な判斷を下してはなるまい。例へば日記に

「文化十二年十月二日晴定刻未夜明久松町にて糞滿々たる後架に片足落しぬ臭氣汚て四圍所の始末絶言語」なとあるからやはり嫌ひだつたらしい。

たゞ問題視するのは、誰もが避けようとする糞、尿、屁なごを、平氣で句にして讀んでゐるこゝである。この事は容易に凡人の出來うるものではない。今も昔もさうであるが、自分の思つたこゝ、なしたこゝを正直に句に作らうとしても仲々難しいものである。萬人が敬遠してゐる對象物を平氣でものしてゐる一茶の氣持はたしかに覺りの境地にあるのではあるまいか。

一茶には、大小便は、我が身から出るものだから粗末にしてはならないと、又は田畑の肥料となるものであるから大切であるとか、そのような心から超越して、我が心にぶつかつた對象が、そのまゝ句作されてあつたまでのこゝである。究言すれば邪惡の立場を去つたあゝの純粹所謂苦勞を知らぬ純粹ではなくて、苦勞を味ひ盡して始めて悟り得たる純粹性である。

こゝにおいて、不可思議な一茶の性格の幾らかを解し得たやうな氣がする。一茶の變つた俳句を、唯單に他人の意表に出でんがために、強ひて作られたものとして句をながめるとき、そこには平凡な奇拔があるだけで、その價值たるや

實に程度の低い劣つたものとなる。

一茶の俳句を一つく讀み味つてみるこゝ、苦勞の上に立脚したる純粹性が反映して他愛ない一茶の人間性に觸れることが出来るであらう、これからさうした俳句を吟味して一茶の人間味に觸れてみよう。

僧正の野糞遊ばす日永かな  
雛棚に糞をして行く雀かな  
さほしかは萩に糞して別れけり  
狼は糞ばかりでも寒さかな  
糞波が蝶にまぶれて仕舞ひけり  
はつ蝶のつかみ込まれた馬糞かな  
花咲くやそこらは野屎野小便  
から紙のもやうになるや蠅の屎  
椎の葉に誰盛りつらん鹿の屎  
なぐさみに野屎をたれる日永哉

右の糞を詠んだ句は、成程上手な句であるとも思へず、又得難い取材の句でもない。たゞ大膽に無造作に詠みこなし  
てゐる所が流石に一茶であると思はれる。

(一)の句は蕪村の「大徳の糞ひりおはす枯野哉」の焼直しであるかもしれないが、實際にあり得べき光景として、天真爛漫に詠み放つてゐる。誰もが、かゝる場面に遭遇したにせよ、包みかくすところであらうに。(二)の句は、雀を吐らうともせず、やあ面白い、といった態度で、他愛なく打ち笑つてゐる一茶が想像され、(三)はなかく味なところを

狙ひ得た句で、鹿それ自體の姿がよく大自然と一致してゐて、微妙な眞を擲んでゐる句である。「花咲くや」は美醜とを對照させたものであらうが、餘りにも平凡な場面であつて、わざ／＼句にしたこいふ感を抱かせるに過ぎぬ。「から紙」の句は、鄙家に屢々見る情景で、別段珍らしくはないが、蠅の糞の一杯附いたところを模様のやうに見える喜んでゐるあたりは、飾り氣のない一茶、無精な一茶をよくあらはしてゐる。最後の「なぐさみに」の句になるに呆れ果てた句で、冗談もほぎにしてみらひたいと云つてやりたいところである。それにしても一茶はこんな剽輕な紙一重の巫山戯た氣持を、多分に持ち合はせてゐたやうである。吾人はこのやうな句が俳句であらうか、俳句よりむしろ川柳ではないかと思ふだらうが、しかしその句の中に他人を笑はせてやらうといふやうな氣分で作意されたとは思へず、たゞ自分の思つたなりを、卒直に、寫實的に詠んでゐる一茶の心は、楽しい生活より出でたものとは思へず、むしろその逆境のなぐさめより出でたるものではなからうか。かゝる點から一茶の句は川柳ではなく、「一茶の後に一茶なし」といへる如き一茶獨歩の俳句なのである。

次に小便を詠んだ句を十ほぎ掲げてみよう。

むく起に小便ながら御慶哉  
小便の瀧を見せうぞ啼く蛙  
小便の穴だらけなり残り雪  
小便の香も通ひけり菊の花  
酒臭し小便くさし菊の花  
船の月小便無用々々ござ  
尿すれば皆立つ欄の千鳥哉

杉で聳く小便桶や秋の暮

小便所爰に馬よぶ夜寒哉

小便もうかこはならず今朝の春

(一)の句の如きはまことに野人一茶のありのまゝの行動であるに違ひあるまいが、普通の人ならば、假令このようにまで直截に詠み捨てはしないものである。こゝに體裁や上品ぶつた、又他處行きの態度を微塵も出さぬ一茶の異色があるわけである。勿論この異色は句の價值云々とは別問題で、時には野卑な又低劣なそれが甚しい句になつて、非常に句の眞價を落すこともあらうし、又時には眞を衝いた句として絶讃されることにもなるであらう。たゞ自分としてはこの異色ある性格に、何さなく、好きさ、偉さを認むるものである。(二)の句は自分といふはつきりした存在意識をもつては作られない句で、完全に童心に却つてはじめて作られる句であらう。(三)(四)(五)(八)はありふれた光景を、誰でも見つけることの光景を、十七文字にしたまゝである。普通の俳人だつたら、こんな光景は句にならぬものとして誰しも見捨てゝ顧みないところを一茶なるが故になつたといふまでもある。(六)(七)(九)(十)はそれ〴〵一茶らしい小便の匂ひのする句である。就中(七)の句なきは、剽輕な一茶の姿を聯想させるに容易な句で、漫畫式俳畫にでもしたならば、まのあたり人間一茶がおどり出てくるように感ぜられる。小便といへば一茶の幼少年時代は毎日繼母の子仙六を負はされてゐたので、背中に小便の乾いたときはなかつたこと述懐してゐる。それであなたがち弟仙六の小便に漬つて育てられたからでもあるまいが、自分の小便、他人の小便、はては又蟲けらの小便を見るにつけても、辛かつた幼少年時代を屢々想ひ出すことがあつたらうと思はれてならない。

小便に關聯してこんな逸話も残つてゐる。松代藩の家老が、親族の結婚祝ひのため、秘藏の文晁の畫幅を贈らうとして、一茶に贅を依頼した。ところが一茶はそれに、

來年は小便くさき炬燵哉

を書き添へた。するゝ家老某はぶん／＼怒つて、小便くさは何事だゝ、えらい權幕でその畫幅を切りさいてしまつた。ところが家臣某に、この句は夫婦睦じく目出度く子寶も出来るやうに／＼祝句であるゝ聞いて、家老某は後悔して止まなかつた／＼いふことである。

以上つまらない批評と逸話／＼をのべ來つたのであるが、要を達し得なかつたようにも感ぜられる。究極する所吾人の知る、

やせ蛙まけるな一茶／＼にあり

雀の子／＼このけ／＼お馬が通る

このやうな無邪氣さをもつ一茶を御存知でせうが、私はもつゝ掘りさけ、あるひは裏面から一茶の生活觀をほんの一面だけ記述したに過ぎないものである。

——終り——